

レクリエーション かながわ

スコレ

(S C O L E)

発行日 平成9年11月15日
 発行 神奈川県レクリエーション協会
 編集 広報委員会
 事務局 〒231
 横浜市中区山下町54
 県庁山下町分庁舎5階
 電話 045-651-5529
 FAX 045-651-5530

かながわレクリエーションネットワークをサポートする



みんなで楽しくガッツだぜ!!
 かながわレクリエーションフェスティバル
 兼スポーツフェスティバル
 オープニングセレモニー'97・10・26海老名市

いまだ「ごぼれ話」に至らず

編集委員 三枝 忠一

四十年史は目下編纂中である。委員会では、原稿の枚数勘定、座談会のテープ起し、掲載項目の加除訂正参考資料の是非、そしてネーミングの検討など一連の作業を行っている。これらの作業過程を編集委員を通じ40周年記念事業実行委員会、役員会の了承の手順を経て進められている。

目次の順に大別すれば、県協会編、地域協会・種目協会編、資料編となる。このほか、県レク発展に寄与された方々による座談会、古い理事を中心にした「思い出の記」も多くの方々のご協力で出来上がりつつある。

これらの方々の中には、他界された方、現在ご病気の方もあり、甚だ残念であった。いづれにしろ、現在は編集も九合目に達したといえる。

この四十年史は、平成七年から取りかかったが、昭和三十年代の資料不足には弱った。幸いに県教委体育課作成の「県民神奈川」が唯一の頼りで大いに活用した。

それと作成以前からの懸案は予算の問題だった。果して出来上がったあとの販売のことと資金の回収も悩みの種だ。そこで役員会で知恵を絞り新年会、表彰式、パーティ、記念史の販売等を一括してやることになりこれの実施に、池端理事長が奮勇を振り、汗をかいている。

自分達で苦労して書き、それを自分でまた購入する。おかしな話であるがスポーツ団体の記念史を作るときのパターンであり、宿命とも言うべきかもしれない。よろしく皆さん方のご協力を切望する次第である。とり急ぎ報告したい。

40th. anniversary

県レク40年のあゆみをふりかえりながら、明日のレクリエーションを語りあいましょう!

日時 平成10年1月31日(土) 14時

会場 ロイヤルホールヨコハマ

会費 壱万円 内容 記念式典・レセプション

申込み 事務局へ12月10日まで

— 事業告知 —

これからのレクリエーション運動の目指す方向

(財)日本レクリエーション協会
広報出版部長 河原塚 達 樹

市民に多様で、多彩、そして健全な余暇活動の機会を提供するレクリエーション運動の新たな展開をめざす緊急総合5ヵ年計画がまとまった。去る6月19日の(財)日本レクリエーション協会理事会で決定されたもの。本計画がこれからのレクリエーション運動のあり方を示した具体的な事業計画と言えるだろう。主な内容は月間REC97年7・8月合併号で紹介しているので、ぜひ、そちらを参照いただきたいが、ここでは、そもそもレクリエーション運動は何のために行なう活動なのかを確認し、この稿のテーマであるこれからのレクリエーション運動のあり方について考えたいと思う。

市民の自主的な社会運動としてスタート

そもそもレクリエーション運動の目的とはなんだろうか。この問題を考えるには、なぜ米国でレクリエーション運動が生まれたのかを考えるのとよい。一八〇〇年代後半に生まれたレクリエーション運動は、よく知られているように当時、後進の産業国家として急速に拡大していった米国、シカゴにおける青少年の遊び場づくり運動としてスタートしている。シカゴに地方から集まったたくさ

場の確保し、健康的な遊びのプログラムを提供し、次代を担う子どもたちに健やかに育てようという活動が生まれ、瞬く間にアメリカ全土に波及したのである。

つまり、レクリエーション運動は当時の米国の大きな社会問題に対する市民の自主的な解決策として生まれたものなのだ。米国では、やがてこうした市民の運動が行政の中に根を降ろし、今日では「公園・レクリエーション局」など、各州、各市に専門の部署が設けられるようになって

レクリエーション運動は、社会の課題を解決するための市民の自主的な取り組みでもあるのだ。そう考えると、現在の日本の社会的な課題はなんで、それにレクリエーション運動はどう答えるべきかが、これからのレクリエーション運動のあり方を考える際の基本であることがわかるだろう。

日本の社会問題にどう関わるのか 現在の日本社会の問題は何か。端的に言えば、経済的な豊かさを実現

した反面、人と人、人と自然とのつながりが希薄化、あるいは消失していることが最大の課題だ。都市の高齢者の孤立死、学校のいじめ、家族の解体、少年犯罪の凶悪化、援助交際、公共空間でのゴミのポイ捨て、乱開発による自然破壊。こうした問題は、人と人の結びつきがなくなり、

孤立化が進行し、他者や自然と共生して生きるといふ視点をなくしていることが大きな要因としてある。しかし、これらはある種の必然がもたらしたものである。人付き合いの余計な気遣いをせずに気ままに過ごしたい、何事も快適で便利でありたい、自分だけはいい学校に入り、いい企業でいい生活をしたい、そしてあれもほしい、これもほしいと物の豊かさを求めた結果である。当然ながら、これらの欲望を権力で抑圧することはできない。むしろ、人間の中にあるもうひとつの欲求(「人と人が共感し、信頼しあえる関係がある、自然との豊かなふれあいを得られている」など)を拡大することで、こうした欲望を縮小させて行くことが大切だ。

かつて、レクリエーション運動の原点であった遊び場運動が、シカゴの子どもたちに健やかな遊びの場を提供することで、暴力と非衛生、少年犯罪を縮小させたように、現代の日本社会では、人と人、人と自然との豊かなふれあいの機会を余暇の時間に提供することが求められているのだ。市民の自主的な運動としてである。それが、レクリエーション運動の目的である。

どのように人と人、人と自然とのふれあいを創るのか

では、どうすれば人と人、人と自然との豊かなふれあいを作り出せるのだろうか。その鍵となるのが、緊急総合5ヵ年計画で示された「市民に多様で、多彩、そして健全な余暇活動の機会を提供する」というレクリエーション運動の目的である。

抽象的なことばを使っているが、要するに「一般の人たちが楽しめるような余暇の場をさまざま提供していくこと」である。

ここで大切なのは、「さまざま」という点だ。そして、日常的、継続的な場の提供である。レクリエーションゲーム、ソング、ダンスという狭い理解はぜひぶん少なくなってきた。しかし、レクリエーションはウォークラリーなどの単発のイベントやニュースポーツの教室を開くこと、という理解はまだまだ根強い。もちろん、それもレクリエーション活動の一部ではある。しかし、単発のイベントや教室だけで終わってしまつては、人と人、人と自然との豊かな結びつきを実現するような場は作り出せない。

たとえば、ブーメランの教室からクラブを作り、ブーメランを通じて少年から中高年、高齢者まで、多様な世代がともに楽しさを共有し、そこに人と人のふれあひ、共感を生み出すようなことが可能だ。こうした種目型のクラブのほかにも、レクリエーション協会だから可能な親子や高齢者を対象とした世代型のクラブや身近な自然を育み、守るような里山づくりのレクリエーションクラブなどを作り、日常的、継続的に楽しみ人や自然とふれあえるような機会を創ることが重要である。

これからのレクリエーション運動は、一般の人たちのさまざまな要望、好みに応えられるような日常的、継続的な活動の場を市民の自主的な社会活動として作り上げていくこと。これが、基本となる。

医学的面から見た「レクリエーションと運動」

シリーズ(一)

関東学院大学教授 鈴木 木 秀 雄

レジャーの中に存在するレクリエーション(紙幅の関係から以下「レク」と略す)は、本来、楽しさと予防を含む癒しという両側面の領域を持つているのだが、日本では実践活動の指導に着目するあまり、その本質の理解にまで達していないのが現状である。このことは指導者にも言えることで専門性を強調するがために概念を狭い領域で捉えてしまっている。

楽しさとは、レクそのものの実践を目的とし、癒しとは、レクを手段化し、何らかの目的のために利用することを意味している。レクは、①自由で②選択され③そのこと自体を楽しむことを目的とする「本来のレク」即ちカフェテリア型から、拘束される度合いの強弱の違いを持って「作業的レク」即ち処方型までの一連の広い分野にわたっている。

現在社会の中でレクの貢献領域を明確にするとすれば、レク活動を目的とするのか、手段化して目的を達成するために活動を活用していくのかということになる。

全米医師会が一九六一年にはステートメントとして、レク・サービスは積極的な、①健康に役立つ②病気の予防に役立つ③病気の治療に役立つ④諸技能・諸機能の獲得・回復に

関東学院大学教授 鈴木 木 秀 雄 役立つと述べている。健康の三要素は、休養、栄養、運動であることはよく知られている。この三要素の中で、生理的な欲求として自然発生的には起こらないのが運動である。意識しなければ日常生活の中に生まれてこないことを意味している。積極的な健康を得るためには、意識して活動としての運動を取り込まなければならぬのである。人間の活動を領域化すれば、頭、心、体を使った諸活動として分類することができる。レクは身体的分野の運動だけに限らず、心や頭の運動としても、ある時は楽しみな活動として、そして時には、癒しにあたる活動として活用できることになる。特に高度技術化、高度機械化された現代社会にあって人間として積極的な健康・体力を維持増進していくために必要な運動の絶対量を日々の中で満足に得られていない人は少ないのが現状であろう。

好むと好まざるとにかかわらず、レクとしての運動の存在は、単なる楽しみの領域だけではなく、生活を豊かに健康で過ごすために、時には楽しみを目的とし、必要に応じて手段化し、意識して運動を実生活の中に位置づけなければならぬ時代になってきているのである。

よろこびを広げよう! - 藤沢市 -



協会主体型から一般参加型へ (藤沢市レク・フェスティバル)

かながわ・ゆめ国体を来年に控えた今年の4月、2年間の全面改築工事を終えた秩父宮記念体育館がオープンした。この体育館を活動拠点にしていた藤沢市レクリエーション協会にとっては待望のオープンだった。

今年で12回目を迎える「藤沢レクリエーションフェスティバル」、オープンしたてのこの体育館で開催することができた。

会場は、華やかな衣裳を身にまとった参加



親子でナイスショット!!

者が繰りひろげるフォークダンス、日本の伝統を感じさせる民踊などで、熱気に包まれた。しかし、今回のフェスティバルはこれだけではない。

もっと広く一般の方にレクリエーションの存在を知ってもらおうと、ニスポートの体験コーナーを設けた。種目は、バウンドテニス、スカットボール、ペロク、ダーツ、ワナゲの5種目。初めて触れる人が簡単に取り組めるように、そしていろんな面白いものをとることで選んだ種目だった。結果的にこの選択は大成功。熱中している親子連れの姿はとても微笑ましかった。

協会員主体型のフェスティバルから一般参加型に変えていくことで、「レクリエーションのよろこび」をさらにひろげていきたい。

おめでとう!! 永年の功績に対して日本レクリエーション協会会長表彰

第51回全国レクリエーション大会の開会式式典においてこれまでレクリエーション運動に貢献してきた方々が表彰されました。本県からは、永年にわたりレク運動に貢献したとして、加藤妃生子氏、平川栄吉氏、岸正晴氏の三名が会長表彰をそれぞれ授与されました。



加藤妃生子さん

第51回全国レクIN北九州大会に永年関係各位の温いご指導を戴き乍ら、頑張ってきたその成果を認めて表彰して下さい、大変うれしく存じ、心から御礼申し上げます。昔、東京オリンピックの後、社会のニーズに答えて婦人スポーツが種々誕生した中で、S49年全国に先がけて、神奈川県で始めて「女性のスポーツは女性の手で」をスローガンとして、組織・運営はすべて家庭婦人の手作りで発足致しました。丁度4年目になった時、全国レク神奈川大会が横浜

市を中心で開催され、そのテーマは「地域に根ざしたスポーツレクリエーション活動の日常化」とあり私達の主旨にピッタリで、ユニークで豊かな心で楽しくスポーツが出来る事に感動して県協会に加盟し、全国各地から集った方々と種目を越えて交流が出来て友情の輪がひろがりました。私達の上部団体もその後日本レクリエーション協会に入り、25

年間、数々の障害を乗り越えて、生涯スポーツの発展に努力した事で高く評価して下さい、名誉ある授賞となった事と思います。神奈川県レクリエーション協会始め関係団体の温いご支援ご協力を戴き乍ら更に努力を重ねて参りたい所存で居ります。



平川栄吉さん

ここ暫く全国レク大会から離れていましたが、このたび第51回全国レクリエーション大会IN北九州の開会式の席上で賞を頂き、すこし気恥ずかしさを感じると同時に、改めて感謝申し上げます。

青少年団体の活動で培った、知識技能などを糧として、また、よき先輩(故人)にも恵まれ、レク活動のめり込んでいった当時が思い起こされて来ます。

日本レク協会の2級指導者資格を取得して初めての講義。どきどきで受講者の顔なんか全然見られなかった当時鮮明に浮かび上がって来ます。

レク活動でも、時代の変遷とともにその姿を変え、今や生涯学習・生涯スポーツを標榜する時代になって来ています。

しかし、何時の時代になっても初心を忘れず、今後も積極的に活動していきたいと考えています。



岸正晴さん

高校時代にちょっと噛んだレク活動。大学では福祉を学びながら、ハンドゲームやゲームソングの創作や開発も。松原五一先生とも指導活動でごいっしょしたのもちようどその頃でした。

就職をしても、そんな技能を活かしながらボランティア活動を続け、レクリエーションはいつも私の生活そのものでした。そしていつのまにか、「人に笑われる」ことに快感を覚え、人々の笑顔、子ども達の笑う声が聞きたくて30数年経ってしまったというのがホンネです。ここまでやってこれたのは、私がレク活動に心血を注ぐ以上に、私に尽くしてく

れた多くの仲間のおかげです。

日本レク協会会長から、今回表彰されましたが、「私」ではなく、私を支えてくれた多くの仲間がいたものだものと思い、これからもレクとその仲間を大切にしていきたいと思えます。ありがとうございます。

★編集後記★

編集後記? うーん いったい何を書いたらいいのだろう!!

平成8年度から県レクの広報委員会に所属しておりますが、大変、文章を書くのが苦手な私です。

現代は、よく情報化社会と言われますが、最近、わが家にホームFAXを入れました。今は高校生でも携帯電話を持っている時代なのに、今頃FAX?と言われるかもしれないですが、これは私にとっては大変な進歩です。さらに携帯電話、パソコンと夢は続きます。

「あゝ早く情報化社会に適應できる人間になりたい。」と思っている今日この頃の私です。(青木孝一) 編集委員の仲間入りさせていたただいたとは、聴こえがいいが、ただ行って行くばかり。 あっという間の2年間。ありがとうございました。(佐藤)

◎事業報告

※9月23日チャレンジ・ザ・ゲーム普及審判員講習会に参加35名